

# 中巻

貴女のお尻に  
ビール瓶  
南海部 覚悟

「それで何だったの、あの黒いの？」

さながら大学の実験室然とした、鑑識課ラボの打ち合わせコーナーで、黒木玲子と白河笑子は、まるで雀の巣のような、奥寺のカール頭を見つめていました。

「ひとこと言いますと・・・自律制御マイクロドローン。」

「ドローン？」

「一辺3mmの正方形本体の四隅に、微小リフトファンが付いています。其々の回転数を制御することで、空中を自律して自由に飛ぶことができます。」

「こんな、小さなものどうやって組み立てるの？」

ルースタンドを覗き込みながら、笑子が尋ねます。

「3Dプリンターで、積層一体プリントするんだ。そのプリントプログラムのダウンロードサイトを見つけた。」

「プログラム通販？」

「その通り！でも、本体のプリントプログラムと制御プログラムは、無償で公開されている。有償はオプションパーツのプログラムと、ピュアマテリアルだ。」

「じゃ、汎用マテリアルを自分で準備すれば、私でもタダで作れるってこと？」

「本体の構成は、無接点充電式のバッテリー、赤外線カメラ、運動制御チップ、超音波障害物センサー、顔認証チップ、フラッシュメモリーだ。これらが一体で3D積層プリントされる、重複した機能のチップもあるから、恐らく個別の大量生産品をCTスキャンして、データを組み合わせてプログラムを作ったんだと思う。より精密な3Dプリンターとピュアマテリアルを使えば、寸法を縮小して更に小さなものが作れる。」

「オプションパーツってなに？」

奥寺が自分のノートパソコンに表示した、ドローンの構造説明図を見ながら、玲子も尋ねます。

「オプションパーツは3種類しかないんですよ、本体の真ん中にある丸い穴に装着されるようなんですが、ひとつはコッククロフトウォルトン回路（昇圧回路）と電極、本体の電源を使ったスタンガンのような代物です。もうひとつはやはり電源を使った発火装置、本体ボディーがマグネシウムで出来ているので、空気中で勢いよく燃えて、本体共々消滅します。最後はマイクロカプセルと注射針、本体から6本の細い足のようなものが出てるでしょ、これで対象物に留って注射針で何らかの液体を注入するんだと思います。」

「――まるで、蜂か蚊みたい。」

「考えられる用途は？」

「複数の加害者から逃れる、自衛用のドローンじゃないかと思います。赤外線カメラが

付いていますから人を認識・追尾できます、前者二つのパーツは明らかに、加害者（人間）の動きを一時的に封ずる機能だと思います。」

「三つ目は何に使うのかしら？」

「サイトの一番奥の目立たない場所に、妙なリンクが貼りついていましてね、様々な有機物の抽出・精製方法を解説した裏サイトに飛ぶんです。」

「毒物の製法もあるのね？」

「ええ、ニコチンだとか、リシンだとか……。」

「オプションパーツを重複して装着することは？」

「穴がふたつですから、ふたつまでなら……。」

「顔認証チップは？」

「所有者が自分の顔を登録しておくんだと思います、自分だけはドローンから襲われないように。」



「それと面白いことなんですが、制御プログラムの中にパスワードでフィルター掛けられた部分がありまして、何とかこじ開けて内容を見てみたら、警察庁が保管している、全国の暴力団中間幹部の顔写真リストなんですよ、何でこんなものが無償配布されているのか……。」

「今度の被害さんの写真は？」

「———ありましたよ。」

「機密データーなんでしょ？」

「最高幹部の顔写真は一般に公開されていて、メディアにもよく露出しますが、中間幹部のものはねえ、でも特定機密保護法に指定されているわけじゃないので、犯罪にはなりません。」

「このドローンに関連して、法に触れそうな部分はまだないんです。毒物の裏サイトにしても、情報提供だけじゃ犯罪にはなりませんし、ドローン自体のプログラム通販サイトも、ウィキデザイン・ウィキプログラム・ウィキプロダクトのようですから。」

「———何？ウィキって。」

「ウィキペディアよ、サイトにアクセスした全員が自由に書き込める百科事典、それと

同じようなもの。」

「プログラムのディテールにかなりの重複部分と書き加えの痕跡があります、工業製品のデザインとして、どうも一貫したものが無いので、相当数の人間が書き加えに関与したプログラムだと思います。」

「困ったわね、じゃ今度の事件は犯罪の構成要件に一貫性が無いってことになるわ。」

「だから、この前話した通り路地に連れ出されて、二三発殴られ、ポリバケツに頭突っ込まれて、その後何か火箸のような熱いもので、背中を焼かれたんですよ、それ以上のことは覚えてないです。」

女刑事二人組の、突然の訪問を受けたサラリーマンは、自宅アパートの居間でオドオドしながら質問に答えています。

窓の下の広い校庭から、小学生の元気な声が上がってきます。

「周りに何かいなかった？」

「その・・・ヤクザ4人と、あとは銀蠅がワンワンいただけです。」

「銀蠅ってこれ？」

玲子がマイクロドローンを、白いハンカチに乗せて、サラリーマンの前に突き出すと、小さな目の眼球を零れ落ちんほどに見開いて「こ、これを何処で・・・。」

「ヤクザの上着からひとつ、現場をよく調べたら地面にあとふたつ落ちてたわ、指紋採取はこの大きさだから無理だとしても、付着体液のDNA鑑定してもいいのよ。」

サラリーマンの体が小刻みに震え、額から大粒の汗が溢れてきました。

「あなたが連れ出された時、店のドアは内側からロックされたから、路地は一時的に密室になってたの、観念しなさい！このままじゃ殺人犯になっちゃうわよ！」

両肩を落としたサラリーマンは、そのままゆっくりと真実を語りはじめます。

(マイクロドローンは、自衛用に常時20個ほど持ち歩いていて、オプションパーツは、証拠も燃えてなくなると思って発火装置を装着した、あの夜、命の危険を感じたので彼らに対して使ってみた、3機が自分に向かってきたのと、3機も燃え残ったのは、想定外で訳が分からない。)



「うちの鑑識によると、発火装置は設計がいい加減で、3割ほどは発火しないそうよ。それに、あなたポリバケツに頭突っ込まれて、顔中残飯だらけだったんじゃない？」

「――顔認証がそれで作動しなかったんですか！」

「毒物の闇サイトへのリンクも、知ってるわよね。」

「あんなもの、怖くって使えませんよ・・・人を殺す訳じゃないんだから。」

「一体誰から、このサイトのこと教えて貰ったの？」

「店のマスターですよ・・・以前店で同じようなトラブルに巻き込まれた時教えて貰ったんです。」

「マスター？この前から店にいないみたいだけど？」

「2週間ほどヨーロッパに行ってるって聞いてます。」

「観光？」

「自衛用具の展覧会があるらしいんですよ、マスターの趣味です、なにせ若いころは機動隊員やってたらしいですから・・・。」

急転直下です、立ち上がった玲子が携帯を取り出そうとすると、逆に電話が掛かってきました。

「刑事部長の佐藤だ！黒木、大変なことになった！福岡中の組事務所で組員がマイクロドローンに襲われている、死人が大分出ているようだ、白河と一緒に収容先の大学病院に行ってくれ！」

大学病院の救急処置センターのベンチに、穴見女医が疲れ切った表情で座っています。周囲は衣服を脱がされ、刺青の露わな組員が、何人もストレッチャーに横たわっていました。

「ああ、あなたたち・・・ここに呼び出されたの？」

「どんな状況ですか？」

「見ての通り・・・ここにいる組員はみんな意識が無いわ。既に5人亡くなった。この前のアブリンと違ってもっと即効性の毒素よ。福岡市内5か所の事務所が襲われて、8か所の病院で対応している。」

「組員以外に被害者は？」

「警備していた機動隊員が何人か刺されたみたい、幸い死者は出てないわ。暴力団対策部は、今度も組同士の抗争事件って見てるようね、ドローン使って戦争する暴力団も無いでしょうに・・・。」

「これじゃ、事情を聴けないでしょうね。」

「無理ね、みんな生死を彷徨ってる・・・。」

県警察本部最上階会議室に、福岡県警最高幹部3名と、刑事部及び暴力団対策部全スタッフ、黒木・白河女性刑事コンビ、鑑識の奥寺と解剖医の穴見が集められています。県警本部長が苦渋に満ちた表情で口火を開きます。

「約800人の組員が襲われ、120人が亡くなった。警備に当たっていたわが機動隊員も5名が刺され怪我を負った。今回使用されたマイクロドローンに関しては、鑑識から上がった資料を、全員に配布している。刑事部長、昨日の経過を報告してくれ。」  
佐藤刑事部長が立ち上がって報告します。

「襲われた5か所の組事務所では、昨日、5つの組織の共通の創設者である人物の法要が、ほぼ同じ時間に、同じように行われていました。外部から搬入された様々な供物に、マイクロドローンが仕込まれていたようです。供物の中には数日前に届けられて、祭壇に供えられていたものもあるようで、ドローン自体の時限プログラムによって、一斉に活動を開始したようです。」

「供物の中から、どうやって出て来たのかね？」

「生花や花輪飾りの中に、分からないように散りばめられていたようです。なにせ、一辺3mmの砂粒みたいなものですから。」

「今回特徴的なのは、現場にいた組員はほぼ一様に刺されているのですが、集中的に何か所も刺された組員がいます、組織の中間幹部といった立場の人間で、全員が亡くなっています。ドローンのメモリーに顔写真が保存されていたようで、お手元の鑑識の資料に詳しい説明があります。」

「最高幹部に死者はいないのか？」

「―――いません。」

「いま刑事部では一課を中心に、供物の配送ルート当たっています。ルートの何処かに共通した事案の現れるのを、全員信じて捜査しています。」

「暴力団対策部では、やはり5つの組織の相互の抗争だと考えて、警備を一層強化しとります！生き残った組員全員に監視ば付けとります。」

暴力団対策部長が立ち上がってアピールしました。

「―――あり得ん、あり得ん！」

佐藤部長が茶々を入れます。

「なんば言うか！刑事部にヤクザのシノギが分かるんかい！」

「暴力団の抗争は、その目的が頭（組長）の命ば取ることにあるとたい、今度んごと、組そのものの屋台骨（中間幹部）ば破壊しつくすことはあり得んろう。昨日一日で福岡ん暴力団は、実働部隊の要ば全て失のうた。組織の実体ば、滅失したとたい！」

「ヤクザの肩ば持つんかい！」

「自分たち若頭の顔写真ば攻撃目標にしとるような、危なか武器は、使わんろうって言うとるんじゃ！」

無然とした表情で、本部長が立ち上がります。

「おいおい、県警本部で抗争は困るぞ！司法解剖医の穴見先生、医学的な見地からお願いします。」

「使用された毒素は、3日前の大濠公園の事件でのアブリンに加え、ニコチンが検出されています。ただし、ドローンのカプセル容量では致死量に達しませんので、死因はやはりアブリン中毒です。ニコチンは即効性を期待して追加されたものと考えられます。」

「どうして、即効性が必要なんでしょうか？」

鑑識の奥寺が手を挙げて答えます。

「鑑識課としましては、今回のマイクロドローンの主な用途が、自己防衛のツールだと考えています。遅効性の毒素のみであれば、自衛の目的が達成できないからではないでしょうか。つまり、ニコチンが本来使用される毒素であり、アブリンが追加された毒素ということです。」

穴見女医が続けます。

「致死の確実性を上げる意味もあるかと思います。アブリンに関しては、最近その作用を阻害する有効なたんぱく質が発見されました、今だ認可されていませんが、アブリン中毒の救命に大変有効な療法で、大濠公園の事件では注入直後に処方していれば、救命できたかも知れません。ただし、この療法は、ニコチン等一部アルカロイドの作用によって効果が薄くなります。」



東公園の緑が西日を受けて、紅く輝きはじめます。初夏の黄昏の空気は、唯々怠惰に時間を浪費して・・・。

最後列で窓の外をぼんやりと見ていたLGBTカップルは、不毛な会議の展開に少々嫌気がさしてきました。



## 貴方のお尻にビール瓶（中巻）

<http://p.booklog.jp/book/115085>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/115085>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト